

### 第八回 柳瀬義富の足跡を訪ねて

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第八回は、幕末・明治期に今治産業界を牽引した柳瀬義富について紹介し、彼の綿業・海運業の足跡を歴史散歩したいと思えます。

#### ●株興業舎躍進の礎を築いた義富

柳瀬義富（一八三〇～一九一四）は、明治期に今治綿業界を牽引した企業家の一人で、クリスチャンでも知られます。彼は、明治二二（一八八九）年に亡くなった伊予ネルの創始者・矢野七三郎の叔父で、七三郎の遺志を継ぎ、興業舎を関西有数の綿業ル会社へ導く礎を築きました。

興業舎の主力は綿ネルでしたが、明治二八（一八九五）年に今治で最初に縫製業を始めています。同社は義富没後の大正初年に、旭町へ煉瓦造鋸屋根の第二工場を建設し（ハリソンの場所）、工場設備の近代化を図りました。現在、興業舎を偲ぶものは、通町に残る第二工場の煉瓦壁のみとなっています（箱助の場所）。



義富が建立した石造灯明台  
(今治市桜井／新天神西口付近)

平成一三（二〇〇二）年度に今治市は「近代産業史顕彰事業」を行い、その中で義富の生涯にも光を当てています。この時、今治市中央図書館に彼の胸像が設置され、再顕彰（検証）の機運が高まりました

●義富の廻船御用の足跡①（桜井）

藩政時代の義富の足跡が、海に関係の深い地域に残されています。その一つ、桜井の綱敷天満神社（新天神）西口付近に、海上安全を祈願する六メートル近い高さの石造灯明台があります（幕末期竣工か）。「金毘羅大権現」の文字とともに、建立者「柳瀬亀之輔義富」の名が大きく刻まれています。桜井は、江戸中期以降は当地域天領の年貢米積出港となり、椀舟に代表される廻船行商の基地でもありました。

もともと柳瀬家は、木綿商を主力とする今治藩の御用商人でした。義富の代になると海運業にも力を入れ、文久三（一八六三）年に廻船御用の地位を与えられます。慶応二（一八六六）年には藩の許しを得て、波止浜湾の小浦に廻船業務の営業所を開設し



義富を讃える顕彰碑  
(今治市天保山町／有津屋公園)

ています。

●義富の廻船御用の足跡②（大浜）

二つめの足跡は、大浜八幡神社にあります。同神社は、今治藩第一の神社として、藩政時代は城下の町人や武士から厚い信仰がありました。これを物語るものとして、境内の灯籠・狛犬などの石造物や、拝殿の山本雲溪・沖冠岳らが描いた奉納絵馬があります。また、造船関係者が奉納したものが、今治藩主御座船・太寿丸の板図（設計図／一八四〇年）も残されています。

文久元（一八六一）年の玉垣には、「柳瀬屋亀之助」「海上安全」の文字とともに、所有する四隻の船名が刻まれています。また、慶応三（一八六七）年には、他の御用商人らと御座船の構造をした船模型を奉納。これら板図・船模型は、先の灯明台とともに、今治にとって貴重な海事遺産です。

義富は大正三年に須磨の別邸（神戸市）で亡くなり、山方町の観音寺に葬られました。彼を讃える顕彰碑が、現在、天保山町の有津屋公園にひっそり建っています。